

テレジンの子どもたち

2004年夏、私はアウシュビッツ収容所を訪れました。収容者の約7割が送られたガス室、プラインバシーの全くないトイレ、収容者がその前で銃殺された死の壁、死体焼却炉……。中でも私が一番衝撃を受けたのは、人間の皮膚や髪の毛などで作られた洋服が飾られ、その前の部屋一面に大量の白髪が展示されていたことです。私は再びこのような過ちが起きないように、平和を祈り、死の壁の前に献花しました。

本年6月、「テレジン収容所の幼い画家たち展」が開催され、収容所内の子どもたちがどのような絵を描いたのかどうしても見たくて、展示場に向かいました。子どもたちの絵は、絞首刑や銃殺刑の様子を描いた暗い現実を描いた絵もありましたが、明るい色を使って描いた人形劇やクリスマスなどの絵も多いのに驚きました。子どもた

ちの心が死なないように、ナチスと命をかけた交渉の末、収容所で絵を描く許可を取り付けた先生が、自由に、そして夢を一杯に大きく膨らませて絵を描くように教えたのでした。

丁度その頃、英語の授業で、アウシュビッツ収容所で女性オーケストラの指揮者として、音楽により人々を救ったアロマ・ロゼの話勉強していました。私は教科書以外にも本物の資料を用いたり、教科横断的に学習したりすることが重要であると考えていますので、その課のまとめとして、「テレジン収容所の幼い画家たち展」の主催者の野村路子さんから撮影許可を頂いた子どもたちの絵を紹介しました。差別と戦争という重いテーマでしたが、色々な切り口から生徒に感じ、考えさせることができましたと思います。

授業後の生徒の感想の一部を紹介し

ます。

・写真集などから教科書からは分らなかった子どもたちの様子や、ユダヤ人に対する差別の数々が分かった。自分はずいぶんにも差別されてしまったのかを疑問に思ったので、調べてみようと思う。

・今まで授業や話でアウシュビッツなどの事を理解できたと思っていたけれど、実際に体験した人の描いた絵や話は授業で聞く話とは重みが違った。

・どんなに苦しい状況でも、自分の芯を持って差別と闘ったユダヤ人のことをきちんと後世に伝えることが大切だと思った。

・辛い収容所の中にいる子どもたちを楽しませるために大人達が自分の服を切り縫い合わせ人形劇を作ったことに人間らしさを感じた。小さい子どもなのに残酷な絵を描くのは信じられないと思った。自分が小さい時に平和に暮らせて恵まれていると改めて思った。貴重なものを見ることができました。ありがとうございます。

埼玉県立川口北高校 山野井純子